

原著

保育者のキャリア形成の過程に関する研究（4）

— 保育職と一般企業間のトランジションに焦点を当てて —

浅井 かおり¹⁾・浅井 拓久也²⁾

Research on the Process of Career Development for Childcare Workers (4):
Focusing on the Transition between Childcare Professionals and General Companies

Kaori Asai¹⁾ and Takuya Asai²⁾

要 旨

本研究では保育者養成校を卒業して保育職に就いた保育者が、一般企業への就職に移行するまで及び移行時に注目をした。保育職から一般企業職への移行に影響を与えた要因や気持ち等の変化、移行時に直面した事柄に焦点を当て検討をした。

幼稚園教諭経験者2名に半構造化インタビューを依頼し、複線径路・等至性モデル（TEM）を用いて分析を行った。TEM図を作成して分析を行った結果、共通点が見出された。保育職から一般企業職に移行したいと考えた理由については、現状からの脱却、別の環境や業種で自分の力を発揮することへの期待、他業種で自分の力を試したいという挑戦心であった。一般企業職への移行を決意するタイミングについては、年長児を受け持った経験、3歳児から5歳児までの全ての学年を受け持った経験という幼稚園特有の区切りが関係していた。

また一般企業職への移行時については、別業種に就き世界が広がったことへの楽しさを感じ、対子どもから対大人になった難しさや生活リズムの違いに大変さを感じながらも契約や商談等について一から学び、保育職で培ってきたコミュニケーション能力や保育技術を生かしながら移行していったことが明らかになった。

保育者としてのキャリアを構築していった後に、保育の知識や技術、幼稚園教諭として培ってきた力を生かしながら新たな分野で自身の力を蓄え磨いていく。キャリアを広義的に捉えたさいに保育職での経験を生かしながら長期的、継続的にキャリアを構築していく、職業者としてのキャリア構築例が示された。

キーワード：保育者のキャリア形成、幼稚園教諭、トランジション、複線径路・等至性モデル

1 研究の背景と目的

(1) はじめに

本研究の目的は、保育者養成校で保育の専門的

知識を学び、卒業後は保育職に就き保育のキャリアを積み重ねていた中で保育職から一般企業職へと移行したトランジションの背景にある要因や一般企業を次の就職先として選んだ、自身の心を揺り動かし

1) 浅井かおり 東京未来大学保育・教職センター（Tokyo Future University）

2) 浅井拓久也 鎌倉女子大学児童学部（Kamakura Women's University）

た要因、また実際に一般企業職への移行時に直面した要因を明らかにしたものである。

保育者養成校の学生が、「保育職に就職を目指すことに決めた理由については、『保育者になることが夢だったから』（78.6%）が最も高く、次いで『資格・免許が取得できるから』（25.2%）、『授業を通して保育の面白さや、やりがいを感じたから』（24.5%）であった」（厚生労働省，2019，p.124）と示されている。このように保育職に就職する理由は様々であるが、将来的な保育者の志望者は保育者養成校に入学し保育について専門的に学ぶことが多く、実習を通して子どもたちと実際にふれ合いながら子どもの実態や内面を探り、多方面から子どもの理解を深めていく。また幼稚園や保育所、認定こども園や施設といった実習先での実践を通して、社会的機能や役割、保育者の援助や援助の意図等を学んでいく。そして幼稚園教諭免許状や保育士資格を取得し、その資格を生かしながら幼稚園教諭や保育士、保育教諭、施設職員等として働いていく。

筆者の一人が勤務している4年制大学の学生についても、2021年度の卒業生の内、164名の福祉・保育・教職を就職先とする割合は、保育所（52%）、障害児支援施設や児童養護施設などの施設（22%）、幼稚園（13%）、認定こども園（3%）、小学校（10%）となっており、多くの学生が卒業後に保育職に就いている（保育・教職センター報，2022）。

しかし一般的に保育者の離職が問題になっており、幼稚園教諭においては文部科学省の平成28年度の調査によると、離職者数は公立幼稚園で1,218人、私立幼稚園で8,999人と示されている（文部科学省，2018）。

また「保育の現場・職業の魅力向上検討会（第5回）」の参考資料1「保育士の現状と主な取組」においても平成29年時点の保育士の離職率は9.3%となっており、私営の保育所は10.7%と示されている（厚生労働省，2020）。

過去に保育士としての就業経験がある人の保育士を辞めた理由については、「職場の人間関係」が最

も多く、次に「仕事が多い」や「給料が安い」となっている。（東京都福祉保健局，2023）

このように保育者の離職が問題になっており、離職理由についてもマイナス要因が挙げられているが、保育者が離職し保育現場から離れることは、離職した本人にとってどのような意味があるのだろうか。結婚や出産等プライベートな理由を除き、離職要因は負の要因だけなのだろうか。

（2）研究の目的

保育者の離職に関連する先行研究については、大きく分けて、早期離職に関するもの（森本・林・東村，2013、傳馬・中西，2014）、離職や継続に関するもの（川俣，2018、西坂，2014）、離職防止に関するもの（庭野，2020、豊田・柏女，2022）等、多数ある。

また井上（2022）は、保育者の離職についての論文を大きく4つに分類し、その中で、「保育者の仕事が子どものために自己犠牲をいとわない高尚な仕事だと思われていることに問題意識をもっていない点である」（p.8）こと、「早期離職の予防に関心が集中している点である」（p.9）ことを研究上の課題として挙げている。

川俣（2018）は、2006年実施の質問紙調査と2017年時点での幼稚園教諭の就職の状況とをあわせて検討し、改善がなされた課題、継続している課題に加えて、新しい課題として、保育士に限らず幼稚園教諭も求人が集まりにくい状況になっていることを挙げている。

河田・齊藤（2023）については、保育者養成校の学生が保育について学んだものの、卒業後すぐに一般職の就職を決めた学生の決定要因について、「一般職への就職を決めた学生の中には、授業を経験することにより『やりたいことが明確に』なったと捉え、保育職以外の分野への興味を深めることになった学生もいることが分かる」（p.1016）と示している。対象が新規卒業予定者であったため、本研究では保育職から一般企業職への移行に着目をし、保育職から離職した後のキャリアに着目することとした。

卒業後にまず保育職に就き勤務していた保育者が、経験を重ねキャリア構築をしている最中に一般企業への移行を考える要因は何か、また実際に保育者が一般企業職に移行したさいに直面した事柄は何か、それを明らかにすることを目的とした。

2 調査の方法

本調査は、2023年7月22日及び10月21日に実施した。都内の保育者養成校4年制大学の卒業生の中で、幼稚園から一般企業職に移行した2名に、7月22日に半構造化インタビューを実施した。インタビュー協力者については、筆者の1人が勤務する4年制大学の卒業生の中で、保育職から一般企業職に移行したことを大学職員が把握している人物、また直接連絡を取ることが可能な卒業生に依頼を行った。10月21日は、作成したTEM図をインタビュー協力者2名と確認し、内容や細かな言葉の意味合いが合っているかどうかの確認を行った。2名それぞれの経歴は、卒業後に幼稚園教諭を4年経験し、現在は営業職に就いているA氏及び卒業後に幼稚園教諭を3年経験し、現在は映像制作会社に勤務しているB氏である。

半構造化インタビューの主な内容は以下である。

設問1 保育者養成校での実習の種類

設問2 保育者養成校での資格取得の種類

設問3 卒業から現在に至るまでの過程 等。

半構造化インタビュー後に得られた内容を文字に起こし、まとまりのある内容に分類し時系列に並べ、TEM図を作成した。

「TEMは、時間を捨象せずプロセスとして人間の発達や人生径路を捉える方法論である」（安田・サトウ, 2016. p.45）。これまでも安田・荒川・高田・木戸・サトウ（2008）や香曾我部・松延（2013）等がTEMを活用して研究を行っている。保育者から一般企業職への移行は、その人の人生において重大な決断や大きな変化があると推測されるため、本研究もTEMを用いて、個人の決断や気持ち等の変化について追うこととした。

倫理的配慮については、調査に先立ち研究の主旨を説明し、インタビューは自由意思に基づく参加のため同意を得た方のみインタビューを開始すること、研究の途中でも研究への辞退を申し出ることができること、個人情報についての取り扱いやデータの保管期間及びデータやTEM図等の書面の破棄方法について説明を行い、同意書の記入を依頼した。東京未来大学の研究倫理審査にて承認（20 23 -010）を得たものである。


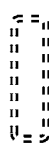



3 結果

保育職から一般企業職へと移行した過程を追うために、期ごとに等至点を設定し、それぞれの等至点に向かうまでの道のりについてTEM図（図1）を作成した。

TEM図に用いた概念及び図例は表1である。またTEMに用いた概念及び説明、本研究での位置づけは表2である。

次に、TEM図の詳細を記す。

表1 TEMに用いた概念及び図例

| TEMに用いた概念 | 図例 |
|---|---|
| 等至点 EFP (Equifinality Point) |  |
| 両極化した等至点 P-EFP (Polarized Equifinality Point) |  |
| 必須通過点 OPP (Obligatory Passage Point) |  |
| 分岐点 BFP (Bifurcation Point) |  |
| 実際に行った行動や選択 |  |

| TEMに用いた概念 | 図例 |
|----------------------------------|----|
| 実際には選ぶことはなかったが、理論的に考えられる行動や選択 | |
| 実際に進んだ経路 | |
| 今回、選択はされなかったが、理論的に考えられる経路 | |
| 社会的ガイド SG (Social Guidance) | |
| 社会的方向づけ SD (Social Direction) | |

(1) A氏の事例

(1-①) 第1期 大学入学から幼稚園に就職をするまで

大学に入学して (OPP)、授業で保育の専門的知識等を学んだ (OPP)。在学中には、はじめに1回目の幼稚園実習に行き、続いて1回目の保育所の実習へ行った。そして施設実習、2回目の保育所実習、最後に2回目の幼稚園実習に行った (OPP)。在学中は、大学の行事に積極的に参加し、大勢をまとめたり組織を動かしたりする経験をした (BFP)。その経験から一般企業職にも行けるかもしれないと思った (SD) が、大学職員より、1回は保育者を経験した方が良く、まず保育職に就きそれから企業に行くか保育職を続けるか考えると良い、と助言を受けた (SG)。保育職に魅力を感じながらも、一般就職セミナーを受けようか悩むが、大学職員からの助言を受け入れ、保育職に就くことを決めた。

そしてまず、友人から実習で実りある経験をしたと聞いたA幼稚園の試験を受けるが、願いは叶わなかった。そのため、大学の就職支援をしているセンターへ求人票を見に行った。B幼稚園の求人票が目

に留まり、B幼稚園に見学へ行った (BFP)。見学時に園長先生の保育や子育て支援についての考え方に感銘を受け (SG)、他の幼稚園の求人 (SD) もあったが、B幼稚園の試験を受けることにした (OPP)。そして合格をし (OPP)、B幼稚園に就職をした (EFP)。

(1-②) 第2期 幼稚園への就職から一般企業に移行するまで

A氏は幼稚園教諭となり、はじめに3歳児クラスの副担任となった。保育よりも人の環境に悩んだ (BFP)。保育をしている中での先輩教諭の視線や指導 (SG) を怖く思い、同期と励まし合い (SD) ながらも、先輩教諭にどう好かれるかを考える日々を過ごしていた。インタビューでは、「気にしない性格もあると思うんですけど、ただ実習では感じなかった、このなんだろう、リアルな人間関係をちょっと苦しいなと思いながらやっていました」と語っていた。クラスの子どもたちや保護者との関係は良好であったため、子どもたちのために頑張っていた。また、継続して子どもたちの成長を見たいという思いで勤務を継続していた。そのような日々を送るなか、同じクラスの先輩教諭が産休に入り、人間関係模様に変化し、先輩教諭たちの冷たい視線や指導が和いでいった (SD)。次年度も再び3歳児クラスとなり、今回は担任となった。担任として、やりたいこと、やってみたいことが前年度よりも実践できるようになった。同じクラスを受け持つことになった教諭は新任教諭 (SD) であったため、新任教諭の保育の手本となるよう、思考しながら保育を行っていた。この幼稚園では、クラスで行う製作内容について、事前に先輩教諭に試作品を見せながら子どもの行う箇所を説明し、許可を得ることになっていた。A氏が製作等のアイデアを提案した (BFP) が、先輩教諭からはそのアイデアを却下された (SG)。しかし少しずつやりたい保育も実践できるようになっていたため、同期と励まし合い (SD) ながら過ごしていた。

そして次年度は5歳児クラスの担任となった。隣

のクラスの後輩教諭と一緒に、例年通りのカリキュラムを実践しながらも、加えて今年はどうするかを試行錯誤していた。変わらず、製作等のアイデアを提案した (BFP) が、先輩教諭のチェックが入った (SG)。しかし子どもたちのために、無事に卒園させたいという思い (SD) で過ごしていた。今回の提案も通らず、例年通りの製作を行った (BFP)。その頃に、大学時代に職員から受けた、1回は保育者を経験した方が良いこと、卒業後は先に保育職に就き、それから企業に行くか保育職を続けるか考えると良い、という助言を思い出し、その時が来たかもしれないと思った。製作の提案をしても採用されず、やりたいと思っていることが実現できない歯がゆさを感じ、この環境から抜け出したい、時間をもったいない、世界を広げたい、新しい業種に行って力を試してみたい、挑戦したいと思い立った。

園長から次年度のクラス発表があり、年中の副担任となった (SG)。知り合いに一般企業職への就職について相談し助言を得た (SG)。同期とは5年は一緒に頑張りたいねと話していた (SD) が、担任として卒園児を無事に見届けた (OPP) ため、一般企業職への移行意思を固めた。移行を考え始めた時期についてインタビューでは、「卒園しちゃったんですね」と、年長児が卒園した、担任として無事に卒園児を送り出したことを一つの区切りと考えていた。

そして、次年度は4歳児の副担任となった。副担任として、初めて自閉症児と関わることになった。同じクラスの担任が同期であったため保育もやりやすく、自閉症児への保育についても新たに学んでいった。先輩教諭の厳しい視線や指導はその同期の担任教諭に向けられたが、A氏は今までの自身の経験から同期の教諭を、大丈夫、気にしないと勇気づけフォローをした。その後、園長に今年度末で退職したいことを伝えた (BFP)。園長からの引き留め (SD) はあったが、一般企業職への移行意思は固く、知り合いに履歴書添削 (SG) もしてもらいながら、移行の準備をしていた。そしてB幼稚園を3月末で退職した (OPP)。幼稚園を退職後に、求人サイトに登録をし

た。そして、求人に応募をした (OPP)。応募のさいの決め手については、「福利厚生と、未経験であってもまずは挑戦しに来てくださってというような、全然違う業種であっても受け入れてくれるような環境だったので、それなら行けるって思って」と語っていた。応募した会社の就職試験を受けることとなり (OPP)、就職試験に合格をし (OPP)、C企業に就職をすることとなった (EFP)。

(1-③) 第3期 一般企業に移行後から現在まで

C企業に就職後は、仕事の流れや、仕事で必要な用語を一から学んだ。生活リズムの違いに戸惑いもした。しかし保育職で培ってきたコミュニケーション力と人前での元気の良さを生かした。大世界になったことに楽しさを感じながら、営業という業務内容や商談の難しさ、今までの子どもとの関わりではなく常に大人と関わり、論理的な数字の扱いをすることの難しさを感じながら、現在に至っている (EFP)。

インタビューでは保育職と一般企業職との違いについて、「大人対子ども。子どもだったのが大人になったっていうところと、保育ってなると決められたものやっつけていけばいいと思うんですけど、営業ってなると全然違ったものに商談っていう全然違うものになってきて、契約だとか、全然違う話になってきて、今もこうやって比べるっていうか説明もできないくらい違うものだったので、それに切り替えるってというのが、一からの勉強っていうのが大変でした。結局は人と関わることはすごく好きなので、そこが辞める理由であった狭い世界っていうのが全く違う大世界に変わったので、今、すごい楽しいなって」、「営業って実は論理的な数字を大事にする職業なので」と語っていた。つまり、保育の内容については先輩教諭のチェックが入ることにより例年通りのものを例年通りに実践していたが、一般企業職に移行して商談や契約という全く異なる業務になり、一からの勉強が大変と感じながらも、狭い世界から抜け出したいと思っていたため、それが大世界に変わり、楽しさを感じていた。

（2）B氏の事例

（2-①）第1期 大学入学から幼稚園に就職をするまで

B氏も大学に入学して（OPP）、授業では保育の専門的知識等を学んだ（OPP）。在学中に、1回目の幼稚園実習に行き、続いて1回目の保育所実習へ行った。そして施設実習、2回目の保育所実習、その後2回目の幼稚園実習に行った（OPP）。大学で行われた行事には積極的に参加した（BFP）。大学のゼミ教員や大学職員から、保育職に向いているため保育職に進むと良いと助言を受けていた（SG）が、保育職以外の道を検討（SD）したい気持ちもあった。その理由をインタビューでは、「自分自身も本当に子どもが大好きで、実習は辛かったんですけど、保育は引かれたルールというか、なればきつとうまくいくんだろうなあって思ってたんですけど、なぜかわからないんですけど、見えてるあれがつまんないなと思っちゃって、もともと子どもが好きっていうのは変わらなくて、大きく分けると子ども関係になるので、私が一般企業に行きたかったのは玩具メーカーの企画とか、玩具に携わることがやりたいなあって」と語っていた。そして大学で一般企業セミナーがあったため、参加した。このまま保育職に就けようまくいくとも思ったが、一般企業の試験を受けるが願いは叶わず（BFP）、気持ちが落ち込んだ。保育職に向いているとのゼミ教員や大学職員に言われたこともあり、大学で幼稚園教諭I種免許状及び保育士資格を取得できるため、それを生かして働こうと思った。その後に母園の幼稚園Aの園長に試験を受けに来よう誘われた（SG）が、大学内の就職支援をしているセンターに求人票を探しに行き、D幼稚園の就職試験を受けることとした（OPP）。そして合格し（OPP）、D幼稚園に就職をした（EFP）。

（2-②）第2期 幼稚園への就職から一般企業に移行するまで

D幼稚園に就職し、初年度から3歳児の担任となった。子どもたちとの関わりを楽しみながら、隣

のクラスの5年目の教諭と同じくらいの保育ができるようにと頑張っていた。D幼稚園では、子ども一人一人のエピソードを大切にしており、保育を進める中でそのエピソードを探すことに苦労をした。また多動の子どもへの対応にも悩みながら、その子どもに合った対応を心がけていた。そして次年度は5歳児クラスの担任となった。子どもの個人エピソードを探すことには慣れたが、多動な子どもへの対応に試行錯誤していた。援助方法を考え、色々と試す中で関わり方や声の掛け方を習得していった。次年度は4歳児の担任及び学年リーダーとなった。運動会の曲等の新しい取り組みを提案した（BFP）が、園長は古きを重んじる考え（SG）であったため提案は通らなかった。兄弟がいる保護者からはまた同じ曲なのかと問い合わせがあった（SD）こともあり、その要望に応えるためにも新提案を試みたが、提案は通らず落ち込んだ。自身の提案が通らなかったため、例年通りの曲で、例年通りの内容の行事を行った（BFP）。その後に、大学のゼミ教員や職員の助言を思い出した。園を変えたいという思い（SD）もあったが、園長の方針は変わらなかった（SG）。今までの保育を振り返り、3年の間に全学年を受け持ったこと、割と全力を尽くせたと思い、狭い世界から抜けて世の中を見てみたい、別の世界で自分の力を発揮し、試してみたいと思った。そして、園長に今年度末で退職したいと伝えた（BFP）。園長に引き留められた（SD）が移行の意思は固く（SG）、一般企業で保育経験を生かしたい、別の形で子どもに夢を与えていきたい思いを伝えた。そして3月末にD幼稚園を退職した（OPP）。

退職後に求人サイトに登録をした。そして玩具メーカーや営業職を受けるが、願いは叶わなかった。次に、映像制作会社の試験を受け（OPP）、合格し（OPP）、就職をした（EFP）。

（2-③）第3期 一般企業に移行後から現在まで

映像制作会社に就職後は、エクセルやワード、パワーポイントについて学び直した。玩具のCMに携

わるさいに保育経験を生かして、演者の子どもと関わったりペープサートの提案をしたりし、採用された。そして、営業、企画、商談、動画作り、撮影、修正、納品について一から学び、大人との関わりになったことを実感した。また保育の見せ方と商談の見せ方の違いを実感しながら移行期を過ごし、現在に至っている (EFP)。

4 まとめ及び今後の課題

本研究は保育者養成校で学び、卒業後は幼稚園教諭として勤務した保育者が、のちに一般企業職に移行した要因及び移行時に直面した事柄を明らかにしたものである。

その結果、保育職から一般企業職に移行した理由については、現状からの脱却、別の環境や一般企業職で自分の力を発揮することへの期待、一般企業職で自分の力を試したいという挑戦心であることが分かった。現状からの脱却については、子どもとの関わりは楽しいと感じ保育することにやりがいを感じながらも、製作や行事内容についての提案が受け入れられず歯がゆさを感じていたこと、また先輩教諭からの必要以上の指導や保育よりも特定の人を気にする環境を狭い世界と感じ、それとは違った広い世界へと考えた情動的な要素が大きかったことが考えられる。別の環境や他業種で自分の力を発揮することへの期待についても、自身の発言や提案が認められたり年齢や立場に関わらず意見交換したり出来る環境を別業種の一般企業職先に求めたことが言える。また一般企業職で自分の力を試したいという挑戦心については、大学時代に大学職員やゼミ教員から、自身の保育者としての資質を見込まれ、卒業後は保育者になると良いこと、その後一般企業職への就職の方が年齢的にも良いと助言を受けたことを思い出したこともあり、移行を決意している。TEMにてSGであった大学職員らの助言も重大な決断に結び付く事柄であったことが言える。

保育職から一般企業職への移行を決意するタイミングについては、幼稚園の中で最高学年の年長児を受

け持った経験や3歳児から5歳児までの全ての学年を受け持った経験という幼稚園特有の区切りが関係していた。幼稚園教諭にとって最高学年の年長児と日々を過ごし、就学に向けての取り組みを行い、卒園児を見送る経験は充実感や達成感を伴うことであろう。また全ての学年を受け持ち、それぞれの年齢の発達や1年間の保育の流れ等を経験したことも充実感に繋がり、それを区切りと捉え次のステップに進んでいったことが言える。

以上のように、保育職から一般企業職に移行した要因や気持ちの変化については1つの要素だけでなく、複数の要素が重なっていた。また現状からの脱却希望はあったものの、前向きに一般企業職へと移行したことが言える。

保育職から一般企業職への移行時については、念願が叶い一般企業職に就き世界が広がったことへの楽しさを感じ、主な関わりが子どもから大人へと変更した難しさや生活リズムの違いに大変さを感じながらも、契約や商談等について一から学び、今までの保育職で培ってきたコミュニケーション能力や保育技術を応用しながら移行時を過ごしたことが明らかになった。

「これまで離職のマイナス要因を中心に研究が行われてきた」(友野・笠原, 2021, p6.)と指摘されているが、本研究は保育職からは離れたが、一般企業職に移行し保育職の経験を生かしながら職業人としてのキャリアを構築し続ける一例を示すことに繋がった。保育職と一般企業職では求められる能力や発揮する力が異なるが、キャリアを広義的に捉えたさいに保育職での経験を生かし応用しながら長期的、継続的にキャリアを構築していく、職業者としてのキャリア構築例が示唆された。

本研究の対象者は幼稚園から一般企業職へ移行した幼稚園教諭経験者であった。そのため、今後は保育士や保育教諭といった職種が異なる保育者における一般企業職への移行要因、移行時に直面する事柄についての検討が今後の課題である。

引用参考文献

- 浅井かおり・浅井拓久也（2021）、「保育者のキャリア形成の過程に関する研究（1）—乳児クラス担任と幼児クラス担任の比較—」、『東京未来大学研究紀要』、第15号。
- 浅井かおり・浅井拓久也（2022）、「保育者のキャリア形成の過程に関する研究（2）—D保育園園長によるクラス担任決定の判断過程について—」、『東京未来大学研究紀要』、第16号。
- 浅井かおり・浅井拓久也（2023）、「保育者のキャリア形成の過程に関する研究（3）—保育士から幼稚園教諭、幼稚園教諭から保育士への転職理由の比較—」、『東京未来大学研究紀要』、第17号。
- 傳馬淳一郎・中西さやか（2014）、「保育者の早期離職に至るプロセス～TEM（複線径路・等至性モデル）による分析の試み～」、『名寄市立大学 道北地域研究所年報』、第32号、pp.61-67。
- 井上剛男（2022）、「保育者の離職をめぐる研究動向に関する一考察」、『鈴鹿大学教職教育センター紀要』、第三号、p8. p9。
- 河田聖良・齊藤多江子（2023）、「4年制保育学生の一般職就職に至る決定要因に関する研究—大学の授業経験と保育実習経験に着目して—」、『日本体育大学紀要』、第52号、p.1016。
- 川俣美砂子（2018）、「幼稚園教諭の離職と継続の理由を探る」、『高知大学教育学部研究報告』、第78号、pp.343-355。
- 香曾我部琢・松延毅（2013）、「公立保育所保育士の成長プロセスと実践コミュニティーグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）と複線径路・等至性モデル（TEM）の比較から—」、『宮城教育大学紀要』、第48巻、pp.167-180。
- 厚生労働省（2019）、「指定保育士養成施設卒業者の内定先等に関する調査研究」、『令和元年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業』、p.124。
- 厚生労働省（2020）、「保育の現場・職業の魅力向上に関

- する報告書」、『保育の現場・職業の魅力向上検討会』。
- 厚生労働省（2020）、「保育士の現状と主な取組」、『保育の現場・職業の魅力向上検討会（第5回）』、参考資料1。
- 文部科学省（2018）、「平成28年度学校教員統計調査（確定値）の公表について」。
- 森本美佐・林悠子・東村知子（2013）、「新人保育者の早期離職に関する実態調査」、『奈良女子文化短期大学紀要』、第44巻、pp.101-109。
- 西坂小百合（2014）、「幼稚園教諭の職業継続の意志と教職経験年数・職場環境の関係」、『共立女子大学家政学部紀要』、第60巻、pp.131-139。
- 庭野晃子（2020）、「保育従事者の離職意向を規定する要因」、『保育学研究』、第58巻、第1号、pp.105-114。
- 東京未来大学（2022）、「2021年度卒業生、福祉・保育・教職への就職状況報告」、『保育・教職センター報』、No.9。
- 東京都福祉保健局（2023）、「第Ⅱ章 調査結果の概要」、『東京都保育士実態調査報告書』。
- 友野優里・笠原正洋（2021）、「保育職からの離職と在職継続に何が関わっているのか：展望論文」、『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』、第53号、p.6。
- 豊田暁宏・柏女霊峰（2022）、「保育所保育士の離職防止のための研究—公定価格上の要因とその克服に向けて—」、『淑徳大学大学院研究紀要』、第29号、pp.67-84。
- 安田裕子・荒川歩・高田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ（2008）、「未婚の若年女性の中絶経験—現実的制約と関係性の中で変化する、多様な径路に着目して—」、『質的心理学研究』、第7号、pp.181-203。
- 安田裕子・サトウタツヤ（2016）、「TEMでわかる人生の径路—質的研究の新展開—」、『誠信書房』、p.45。

謝辞

インタビュー及びTEM図の作成にご協力くださいましたA氏、B氏に心よりお礼申し上げます。

（あさい かおり・あさい たくや）

【受理日 2023年11月22日】

表2 TEMに用いた概念及び説明、本研究での位置づけ

| TEMに用いた概念 | 説明 | 本研究での位置づけ |
|---------------------|-----------------------------------|---|
| 等至点 (EFP) | 幼稚園や一般企業への就職、 また現在の状況 | 【A氏】 第1期：B幼稚園に就職をした 第2期：C企業に就職をした 第3期：現在 【B氏】 第1期：D幼稚園に就職をした 第2期：映像制作会社に就職をした 第3期：現在 |
| 両極化した等至点 (P-EFP) | 到達点とは別の職業 | 【A氏、B氏】 第1期：一般企業に就職をした 第2期：保育職を継続した 第3期：保育職を継続した |
| 必須通過点 (OPP) | 等至点に到達するまでに、多 くの人が経験する可能性のある事柄 | 【A氏】 第1期：大学に入学をした 保育の専門知識等を学んだ 幼稚園実習、保育所実習、施設実習を経験した B幼稚園の試験を受けた B幼稚園に合格をした 第2期：卒園児を担任として見届けた B幼稚園を退職した 求人に応募をした 就職試験を受けた 就職試験に合格をした 【B氏】 第1期：大学に入学をした 保育の専門知識等を学んだ 幼稚園実習、保育所実習、施設実習を経験した D幼稚園の試験を受けた D幼稚園の試験に合格をした 第2期：園長に今年度末で退職したいと伝えた D幼稚園を退職した 映像会社の試験を受けた 映像会社の試験に合格をした |
| 分岐点 (BFP) | その後の径路が複数に分かれる事柄 | 【A氏】 第1期：大学の行事に積極的に参加し、大勢をまとめたり組織を動かしたりする経験をした B幼稚園を選択し、見学へ行った 第2期：保育よりも人の環境に悩んだ 製作等のアイデアを提案した 提案は通らず、例年通りの保育や製作を行った 園長に今年度末で退職したいことを伝えた 【B氏】 第1期：大学の行事に積極的に参加した 一般企業の試験を受けるが願い叶わず 第2期：新しい取り組みを提案した 例年通りの行事を行った 園長に今年度末で退職することを伝えた |

| TEMに用いた概念 | 説明 | 本研究での位置づけ |
|--------------|---|---|
| 社会的ガイド (SG) | <ul style="list-style-type: none"> ・他者からの好意的な助言や行為 ・好意的ではないが、等至点に導かれる他者の行為 ・等至点に近づく自身の思い | <p>【A氏】 第1期：大学職員からの助言 園長先生の保育や子育て支援に対する考えに感銘を受けた 第2期：先輩教諭の視線や指導 先輩教諭のチェック 園長から次年度のクラス発表があった 知り合いからの助言 知り合いによる履歴書の添削</p> <p>【B氏】 第1期：ゼミ教員や大学職員からの助言 母園の幼稚園Aからの誘い 第2期：園長の方針 一般企業への思い</p> |
| 社会的方向づけ (SD) | <ul style="list-style-type: none"> ・行為的ではない他者の行為 ・等至点を遠ざける他者との行為や思い、存在 ・等至点を遠ざける自身の思い | <p>【A氏】 第1期：一般企業への思い 他の幼稚園の求人 第2期：同期との励まし合い 先輩教諭が産休に入り、人間関係模様が変化 新人教諭の存在 同期との励まし合い 子どもとの関わり、無事に卒園させたいという思い 同期との決意 園長から引き留められた</p> <p>【B氏】 第1期：保育職以外の道の検討 第2期：保護者の思い、要望 園を変えたい思い 園長から引き留められた</p> |

